

日本語非母語話者による動詞否定丁寧形の バリエーションについて

川 口 良

The Variants of the Negative Polite Verb by Non-native Speakers

Ryo Kawaguchi

This paper aims to clarify non-native speakers' use of the variants of the negative polite verb, the *-masen* form and the *-naidesu* form, and to search for the relation between native-speakers' variants and non-native speakers' language acquisition by comparing the latter with native-speakers' variants verified in Kawaguchi (2010).

Through analyzing KY-corpus data composed of conversation between native speakers and non-native speakers from the same viewpoint as Kawaguchi (2010), non-native speakers' use of the variants is verified as follows.

The use of the *-naidesu* form in information-giving sentences (declarative sentences) is much wider than that in information-requiring sentences (interrogative sentences). The *-naidesu* form in information-giving sentences is used in order to convey the negative judgment even by elementary learners. Advanced learners use the *-naidesu* form of non-negation to express modality. Accordingly, it is assumed that the use of the *-naidesu* form by non-native speakers spreads from negation to non-negation in terms of grammatical meanings. Kawaguchi (2010) predicts that the shift to the *-naidesu* form in language change proceeds from negation to non-negation in terms of grammatical meanings, and this prediction is considered to be the same as non-native speakers' growing use of the *-naidesu* form as their Japanese proficiency develops. Non-native speakers, irrespective of their Japanese abilities, use the *-masen* form in negative interrogative sentences, which includes information-requiring sentences, in order to express solicitation and request, and use very few *-naidesu* form in negative interrogative sentences to ask a question.

The above results are considered to be the same as the use of native speakers' variants of the negative polite verb. Therefore it is assumed that the cognitive process of non-native speakers has something in common with that of native speakers.

1. はじめに

日本語の否定丁寧形には、「～ません」（以下「マセン形」）と「～ないです」（以下「ナイデス形」）の2形式が存在する。川口（2006）では、文法書及び日本語教科書の検証によって、現代日本語の動詞否定丁寧形の規範はマセン形であることを確認し、大学生を対象としたアンケート調査を実施して日本語母語話者の半数が動詞のナイデス形を正用として捉えていたことから、動詞否定丁寧形には「ことばのゆれ」が存在することを見た。また、同アンケート調査において日本語非母語話者である留学生の7割近くがナイデス形を正用と判断していたことから、日本語母語話者（以下NS）の「ことばのゆれ」と日本語非母語話者（以下NNS）の文法性判断の間には、何らかの相関関係があるのではないかと推測した。

本研究はこの推測を出発点として、その検証を試みることを目的としている。

以下では、まず、NNSのマセン形とナイデス形の選択傾向に関わる先行研究を概観し、本研究の研究課題を明らかにしたあと、川口（2010）の調査結果によってNSの動詞否定丁寧形の選択傾向をまとめる。次に、NSとNNSの2者間で交わされた談話資料を、川口（2010）同様の分析視点によって観察し、NNSによる動詞否定丁寧形の使用傾向を探る。最後に、これらの観察結果を踏まえ、NSの「ことばのゆれ」とNNSの言語習得の相関関係について考察する。

2. 先行研究及び本研究の目的

川口（2006）は、前述した調査結果に加えて、初中級日本語学習者が規範形のマセン形を、上級学習者が非規範形のナイデス形を多用する傾向を把握し、「日本語能力の向上」が規範どおりの日本語の習得を意味

するわけではなく、NSもNNSも、ともに不合理な文法規則を変えようとしている可能性を論じた。

このような、NNSの言語習得とNSの「ことばのゆれ」の相関という視点に立脚する研究として金沢（2000）、金澤（2007・2008）がある。まず金沢（2000）は、「なく中止形」¹が状態的な意味を表す動詞の場合に出やすいというネイティブの使用傾向と、超上級学習者の「なく中止形」の使用傾向が重なることから、超上級学習者はネイティブに近い文法性判断能力を持っていると述べている。また、金澤（2007）は、丁寧表現のデス・マスの使用について教室習得者と自然習得者を比較し、教室習得者は「マス」が、自然習得者は「デス」が優位であることを示して、日本語がデスに統合していく将来の姿を、自然習得者が先取りしている可能性がある」と論じている。金澤（2008）は、前述の論考を含め、NSの「ことばのゆれ」とNNSの「誤用」に関する一連の論考をまとめたものであるが、ここでは「日本語の学習者たちが犯すいわゆる「誤用」も、時には日本語自身の「ゆれ」や言語変化と関わりを持ち得る重要な要素として、注目する必要がある」（p.10）と明言されている。

一方、日本語教育の領域から見たマセン形とナイデス形については、小林ミナ（2005）、相澤・澤邊（2005）、澤邊・相澤（2008）がある。小林ミナ（2005）は、母語話者の自然談話にはすべての品詞にナイデス形が多用されるという調査結果から、すべての品詞のナイデス形を日本語教育文法に取り入れるべきであると提言している。また、相澤・澤邊（2005）、澤邊・相澤（2008）は、韓国における日本語教育という視点から日本語学習者のマセン形とナイデス形を取り上げて調査している。そ

¹ 金沢（2000）は、「～（せ）ず、…」という形が規範的であった動詞の否定の連用中止法が、助動詞の部分を「ず」から「ない」に置き換えた「～（し）なく、…」という形式に変化したつつある状況を捉え、その連用中止法の新形を「なく中止形」と呼んでいる。

の結果、韓国の日本語文法学習書に動詞のナイデス形を認めて説明を加えるものがあり、初級教科書でも一部提示するものがあること、学習者は助詞が後接するとナイデス形を許容する傾向があることを示した。

以上の先行研究では、NNSのマセン形とナイデス形の使用状況の詳細については、まだ明らかにされていない。本研究では、川口（2010）で明らかにしたNSの動詞否定丁寧形の選択傾向とNNSのそれを比較することによって、NSの「ことばのゆれ」とNNSの言語習得の間の相関関係を明らかにすることを目的とする。

3. 日本語母語話者によるマセン形とナイデス形の選択傾向²

まず、NSによる動詞否定丁寧形の選択傾向について、川口（2010）で得られた結果をまとめる。川口（2010）では、マセン形とナイデス形の2形式の併存を金澤（2008）同様に言語変化の視点から捉え、発話行為（話し手の聞き手に対する伝達的な態度）に着目して、規範形のマセン形がナイデス形へシフトする要因を探っている。その結果、ナイデス形へのシフトには、次のような傾向があることを明らかにした。

- ① その発話行為として「情報要求」より「情報提供」の方が大きい。
- ② 「情報提供（平叙文）」場面において「否定」の文法的意味を持つ場合に起きやすい。
- ③ 「情報提供」においては、相手の発話に含意される「肯定－否定」の対立について、話し手が「否定」という判断を下したことを伝達する場合に起きやすい。
- ④ 「情報要求」においては、「否定」の意味が顕在化する命題否定疑

2 マセン形とナイデス形のNSの選択傾向に関する先行研究には、田野村（1994）、尾崎（2004）、小林ミナ（2005）、野田（2004）、川口（2010）、金（2010）があるが、動詞否定丁寧形に限って調査したものは川口（2010）、金（2010）のみである。

問文において起きやすい。

- ⑤そのモダリティとして、聞き手への配慮を示す必要性によって「質問」→「確認要求」→「勧誘・依頼」と、小さくなる。

4. 日本語非母語話者によるマセン形とナイデス形の使用傾向

次に、3章でまとめたNSの動詞否定丁寧形の分析視点に依拠して、NNSのマセン形とナイデス形の使用傾向を把握する。まず、4.1で、本章において調査対象とする言語資料について説明し、4.2で、調査する言語形式について述べる。次に、4.3で、発話行為（「情報提供」と「情報要求」）によってマセン形とナイデス形を分類し、4.4で「情報提供」、4.5で「情報要求」を含む否定疑問文における使用傾向を観察する。これらの観察結果を踏まえ、4.6でまとめる。

4.1 調査対象とする言語資料

調査対象とする言語資料は、KYコーパス90人分のデータベースである。KYコーパスとは、NNS90名分のOPIテープを文字化したもので、OPIテスターと被験者による会話コーパスである。90名の被験者の母語は、中国語、英語、韓国語がそれぞれ30名ずつであり、その30人のOPIの判定結果別の内訳は、それぞれ、初級5名、中級10名、上級10名、超級5名ずつとなっている。初級、中級はさらに上、中、下の3レベルに、上級は上、下の2レベルに分けられる。1組の会話時間は、最長30分で、だいたい15分から30分以内である。KYコーパスのKとYは、コーパス作成の担当者となった鎌田（Kamada）と山内（Yamauchi）の頭文字である。

以下、このKYコーパスを調査対象として、NNSのマセン形とナイデス形の使用傾向について観察する。

4.2 考察対象とする言語形式

対象とする言語形式は、動詞の否定丁寧形のうち、マセン形とナイデス形の対立を持つもの限定し、非過去形のみを扱う。「ありません」は形容詞「ないです」(規範形)と対立することになるので、考察の対象からはずし、「すみません-?すまないです」「申しません-?申しないです」「いたしません-??いたさないです」「おりません-??おらないです」「ごさいません-??ござらないです」のように、対応するナイデス形の不自然なものも対象から除外する。また、「(かも)しれませんが」「(かも)しれないです」「(なければ)なりません-(なければ)ないです」「(ては/ちゃ)いけません-(ては/ちゃ)いけないです」のように、否定の意味は持たなくとも、マセン形とナイデス形の対応を持つものについては、考察の対象とする。

4.3 発話行為によるマセン形とナイデス形

まず、川口(2010)同様に発話行為(話し手の聞き手に対する伝達的な態度)に着目し、マセン形とナイデス形が使用された局面を「情報提供」(平叙文)と「情報要求」(疑問文)に分けて、NNSの日本語能力別に分類した。その結果が表1及び図1である。

KYコーパスにおけるNNSの発話行為は、そのほとんどが情報提供(超級63例、上級160例、中級194例、初級42例、合計459例)であって、情報要求の発話はごくわずか(超級2例、上級3例、中級9例、初級0例、合計14例)であった。これは、KYコーパスがNSによるインタビュー形式の談話である影響が大きいと思われる。そのわずかな「情報要求」場面においてはほとんどマセン形(12例)が使用され、ナイデス形は、上級1例、中級1例のわずか2例のみであった。

したがって、「情報要求」場面の分析は留保することにし、以下では、

超級63例、上級160例、中級194例、初級42例、合計459例出現した「情報提供」場面におけるマセン形とナイデス形の使用傾向を、図1によって示す。

表1. 発話行為によるマセン形とナイデス形

用例数 (%)

日本語能力	発話行為	マセン	ナイデス	合計
初級	情報提供	37 (88.1)	5 (11.9)	42 (100)
	情報要求	0 (0)	0 (0)	0 (0)
中級	情報提供	159 (82.0)	35 (18.0)	194 (100)
	情報要求	8 (88.9)	1 (11.1)	9 (100)
上級	情報提供	116 (72.5)	44 (27.5)	160 (100)
	情報要求	2 (66.7)	1 (33.3)	3 (100)
超級	情報提供	44 (69.8)	19 (30.2)	63 (100)
	情報要求	2 (100)	0 (0)	2 (100)
合計		368 (100)	105 (100)	473 (100)

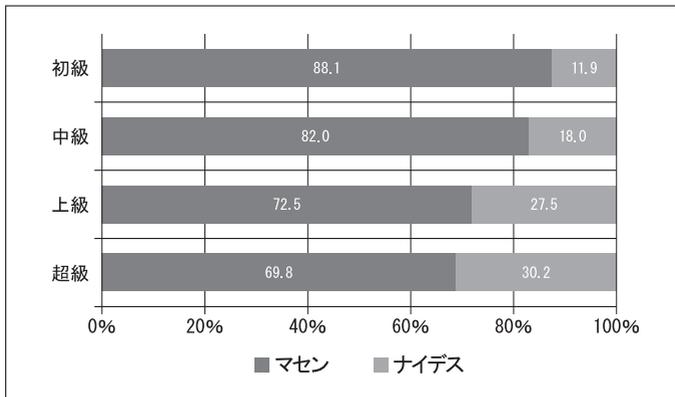


図1. NNSの「情報提供」場面におけるマセン形とナイデス形

図1を見ると、「情報提供」場面では、日本語能力が高くなるにつれて、ナイデス形が増えていく様子が窺える。特に、超級になると、その3分の1（19例、30.2%）がナイデス形へシフトするようになることがわかる。これは、川口（2006）において異なる言語資料³を用いて行った調査結果と同様のものである。川口（2006）では、NNSはその言語能力の向上とともに、知識として得たマセン形よりも、「合理的な文法規則」⁴（野田2001）に適い、かつNSにも用いられるナイデス形の方を多く選択するようになる、と考察しているが、KYコーパスを用いた本調査は、この主張を補強するデータとなるものと言える。

4.4 「情報提供」場面におけるマセン形とナイデス形

では、「情報提供」場面において、NNSはどのようにナイデス形を用いているのだろうか。ここでは、情報提供する場合、つまり平叙文におけるNNSのマセン形とナイデス形の使い方を観察することにする。

4.4.1 「否定」と「非否定」

ここでは川口（2010）同様に、文法的意味として「否定」に着目する。「肯定-否定」の対立をもつものを「否定」、「～かもしれませんが/しれません」などのモダリティ表現と化して肯否の対立を持たないものを「非否定」として、「情報提供」場面において使用されたマセン形とナイデス形を分類した。その結果が表2である。図2、図3は表2を「否

³ 平成10～13年度科学研究費補助金研究基盤研究（B）（1）「日本語学習者と日本語母語話者の談話能力発達の研究」（課題番号10480049研究代表者：水谷信子）において収集した談話資料である。NS 1名を固定して、その同一人物とNNS（留学生）10名をペアとして2回実施した話し合いの談話を文字化したものである。なお、本談話資料の収集には、筆者自身もメンバーの1人として加わった。

⁴ 野田（2001）は、規範形の「（書き）ません」より非規範形の「（書か）ないです」の方が、他の品詞の「おもしろくないです」「静かじゃないです」「学生じゃないです」同様に、非丁寧形に「です」を付けるだけで丁寧形になるという意味で、「合理的な文法規則」だと述べている。

定」と「非否定」に分けて、日本語能力別にマセン形とナイデス形の使用傾向の推移を示したものである。

表2. 「情報提供」場面におけるマセン形とナイデス形

用例数 (%)

日本語能力	文法的意味	マセン	ナイデス	合計
初級	否定	36 (87.8)	5 (12.2)	41 (100)
	非否定	1 (100)	0 (0)	1 (100)
中級	否定	159 (82.0)	35 (18.0)	194 (100)
	非否定	8 (88.9)	1 (11.1)	9 (100)
上級	否定	90 (69.8)	39 (30.2)	129 (100)
	非否定	26 (83.9)	5 (16.1)	31 (100)
超級	否定	33 (70.2)	14 (29.8)	47 (100)
	非否定	11 (68.8)	5 (31.3)	16 (100.1)
合計		364 (77.8)	104 (22.2)	468 (100)

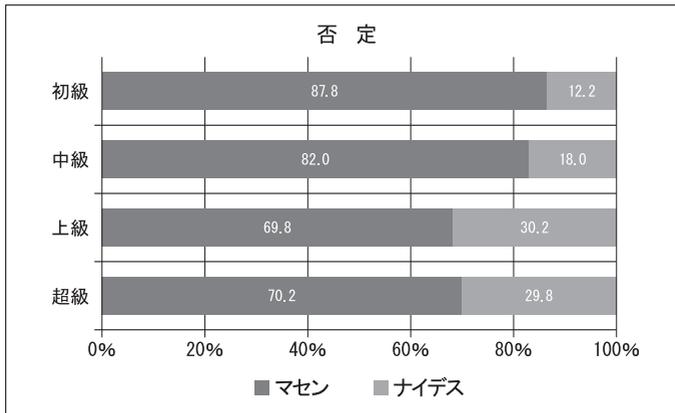


図2. NNSの「情報提供」場面における「否定」のマセン形とナイデス形

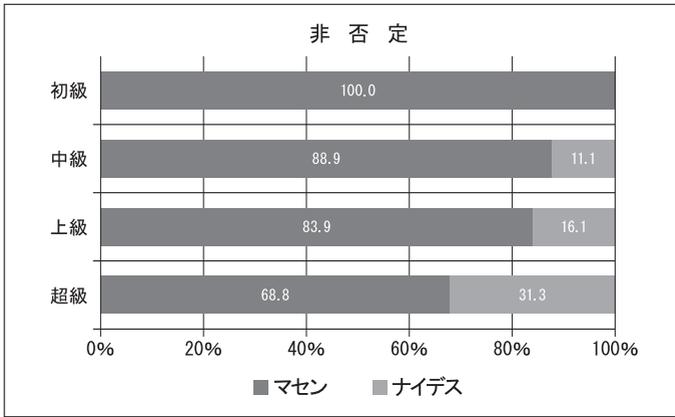


図3. NNSの「情報提供」場面における「非否定」のマセン形とナイデス形

これらを見ると、「否定」の意味では、ナイデス形は初級レベルから用いられ始め、日本語能力が高くなるにつれて、徐々にナイデス形の使用が増えていくことがわかる。NNSも、やはり「否定」の意味を伝達しようとして、ナイデス形を使い始めることが理解される。また、モダリティ表現と化した「非否定」としてナイデス形が使われるようになるのは、以下の用例（1）のように、上級になってからであった。

- (1) 多分うん、だからしょくどはちょっと速いかもしれないですねえ、
 韓国のソウルの、(うーん) うん交通の、しょくど、(ええ) 速度
 (②韓国語話者上級-下03)

NNSの場合、教科書では丁寧体から導入され、動詞の否定形は先にマセン形が学ばれるため、動詞のナイデス形の存在を知るのはかなり後になる。つまり、初級でナイデス形が導入されるとまもなく、「否定」

の意味を情報提供する場合にナイデス形が用いられ始めることが推測される。初級レベルを上・中・下の3段階に分けたKYコーパスでは、以下に示す発話例(2)(3)(4)のように、初級の中レベルでナイデス形が使われ始めていた。この事実からも、前述の推論は支持されるだろう。

(2) T: うん、Sさんは今、アルバイトをしているの？

S: あいいえ、(ふーん) アルバイト しないですうん

(②韓国語話者初級-中01)

(3) T: ふーん、(ん) まあ日本でもお医者さん、病院へ、行ってるんですか？

S: あ、あー、病院へー、体が、(うん) たくさーん、(うん) いたーんじゃな、(うん) 痛いーんじゃないですから、(うん) 病院へー、(うん) 行かないです。

(②韓国話者初級-中01)

(4) T: うん、(あ) 服を、難波で、服を買ったり

S: ああーあー、あいいえ

T: あーしない

S: あー しないです。

(②韓国話者初級-中01)

4.4.2 初級NNSのナイデス形の「否定」

では、その「否定」の意味を有するナイデス形を、初級NNSはどのように用い始めるのだろうか。以下に(5)～(6)を加え、初級NNSによって用いられたナイデス形全発話例5例について、検討してみたい。

(5) T: キッチンで、いつもご飯を作りますか?

S: 作りません、いつもスーパーで、に、行きます、と、ごはん買います。

(②英語話者初級-上01)

(6) T: じゃ、オーストラリアでおさしみを食べたことがありますか?

S: あります、でもね私はオーストラリアでたお、さしみ、が食べません、(ふーん) たぶん、高い

(②英語話者初級-上01)

(2) ~ (6) は、後接要素の付かない言い切りの形式でナイデス形を用いている。そして、それらは、(2)「T: 今、アルバイトをしているの?」「S: しません」(3)「T: 病院へ、行ってるんですか?」「S: 行かないです」(4)「T: 服を、難波で、服を買ったり(しますか?)」「S: しません」(5)「T: キッチンで、いつもご飯を作りますか?」「S: 作りません(作らないです)」(6)「T: オーストラリアでおさしみを食べたことがありますか?」「S: 食べません」というように、相手の質問に答える形で情報提供がなされている。つまり、3章の③で見た、NSのナイデス形の使用傾向同様に、相手の発話に含意される「肯定-否定」の対立について、話し手が「否定」という判断を下したことを伝達する否定判断文の中で、後接要素の付かない言い切りの形式、すなわち「裸の形式」(メイナード1993)としてナイデス形が用いられているのである。「裸の形式」が有する文伝達上の機能が初級NNSに習得されているかどうかは別として、初級で普通体が導入され、動詞の否定形「行かない」を学んでまもなく、それにデスを付加した「行かないです」というナイデス形が現れるようになるのは、相手の質問に対して「否定」で答えるときであり、「否定」の意味を伝達する

ときなのである。この初級NNSに出現したナイデス形は、NSのナイデス形の使用実態と同様のものと考えられる。

そこには、相手の質問に含まれる普通形の影響もあると思われる。答えに関わる相手の質問部分を見ると、(2)「しているの」(3)「行ってるんですか」(4)「買ったり(あいいえ)あーしない」(6)「食べたことがありますか」のように、マスの存在がなく、普通形が使われていることに気付く。「相手の質問に答える」という即時性が求められる場面において、NNSは、「否定」の意味を答えとして情報提供するとき、相手の発した質問文を手かがりにして、「しないです」「行かないです」「食べないです」のように、普通形にデスを付加して否定判断を伝達しているのではないだろうか。

これらのことから、即時性が求められる応答場面において、NNSは、「否定」の意味を答えとして情報提供するときには、相手の発した質問文の中に「ない」という否定辞が含まれれば、それをそのまま利用して、「しない」「行かない」といった否定普通形や、その否定普通形にデスを付加したナイデス形によって応答するようになることが推測される。これは、NSが発したナイデス形による質問文が、NNSのナイデス形を誘発していると言える。つまり、NNSが初級レベルにおいてナイデス形を用いるようになるのは、NSの用いる日本語を聞いたことによるという可能性が指摘できる。NSの「ことばのゆれ」と、NNSの「学習者独自の文法」の関係が示唆されるところである。

4.5 否定疑問文におけるマセン形とナイデス形

次に、わずかな発話例しか出現しなかった「情報要求」場面に目を向け、ここでは、情報要求の発話行為を含むすべての否定疑問文がNNSによってどのように用いられているか、検討する。着目点は、川口

(2010) においてNSの否定疑問文を分析した際と同様に、NNSの否定疑問文が有する、文のモダリティ⁵である。

否定疑問文におけるマセン形とナイデス形の出現状況を、NNSの日本語能力別に示したものが表3である。

表3. 否定疑問文におけるマセン形とナイデス形

用例数 (%)

	初級	中級	上級	超級	合計
マセン	2 (100)	13 (92.9)	7 (87.5)	4 (100)	26 (92.9)
ナイデス	0 (0)	1 (7.1)	1 (12.5)	0 (0)	2 (7.1)
合計	2 (100)	14 (100)	8 (100)	4 (100)	28 (100)

NNSによる否定疑問文は、マセン形26例 (92.9%)、ナイデス形2例 (7.1%)、合計28例出現していた。これらすべての否定疑問文を、川口 (2010) に示したモダリティの種類によって分類し、それを日本語能力別に示したものが、表4である。次頁に、否定疑問文の発話例を示す。

表4. NNSの否定疑問文のモダリティ

用例数

モダリティ		マセン					ナイデス				
		初級	中級	上級	超級	合計	初級	中級	上級	超級	合計
行為系 (実行)	依頼		4	5	3	12					
	勧誘	2	1			3					
情報系 (疑問)	確認要求		3	1	1	5					
	質問		5	1		6		1	1		2
合計		2	13	7	4	26		1	1		2

5 川口 (2010) では、モダリティの分類法を日本語記述文法研究会編 (2003) 及び宮崎他 (2002) に依拠している。

<勧誘>

(1) T: はい、もしもし、Tですけど

S: ん、もしもし (はい) あー、私に、あー食堂、あー、んー
んーレストランで、えー食べませんか。

(②英語話者初級-中02)

(2) S: えー、あの、いい映画、あの映画を、一緒に、あの、みま見
ませんか

T: あ、いいですね、あのーどんな映画ですか

(②英語話者中級-中07)

<依頼>

(3) T: タクシーはどうやって呼ぶかわかりますか。

S: そうですね、これもよくわかりませんから、教えてください
ませんか。

(②中国語話者中級-上01)

(4) S: あーわたしはー、(はい) 留学生会館にー (ええ) 住んでい
る留学生ですがー、(はい) お今、わたしの部屋にー、(え
え) 泥棒がー、(はい) あ、あ来たほう、来たらしいんです、
(えーえーえー) んー、あちょっとーわたしの、あー*** [笑
い]、(ええ) 分かりません、おーちょっとわたしの部屋にー、
(ええ) え来て、えくれませんか。

(②韓国語話者中級-中02)

(5) S: うん、ちょっとよろしければー、(ええ) んー、ちょっと静か
にして、もらいただけませんか。[笑い]

(②韓国語上級-下03)

(6) S: んーちょっとー、この、うる、音、(うん) 声をちょっと小さく、してもらえませんか。

(②韓国語上級-下03)

(7) S: あのわたし頼んでですねー、(ええ) すから、あのどうしてもあのー保証人見つけてー、くださいますかという話で、(ええ)

(②中国語超級02)

<確認要求>

(8) S: もうつきあってる人はい、あーいますか

T: いません、(S: いませんか) あと一つ最後

(②韓国語話者中級-上01)

(9) T: そうですねえ、私家事あまりしませんのでねえ。

S: 料理しませんか。

T: 料理しませんねえ。

(②中国語話者上級-下01)

<質問>

(10) S: たとえば、学生証書ならいりませんか。

T: ううん、それはいりません。

(②中国語話者中級-上01)

(11) S: えーと小林君は、どこに行ったか知りませんか。

T: あ、お兄ちゃん

(②英語話者上級-上06)

(12) T: うーん、んな仕事ですか

S: んー、がい、あーこれ、がい、(うん) うーん、がいしがいし(うん) これちょっと難しいです、(あーそう) がいほうくん、(うん) 知らないですか。

T: 知りません。

(②中国語話者中級-下03)

(13) T: すいませんが本当にこのおかしはかえないですか。

(②韓国語話者上級-下04)

NNSによる否定疑問文28例のうち26例はマセン形が用いられており、そのうち、(1)～(7)のような行為系のモダリティ(「勧誘」「依頼」)が15例、57.7%、(8)～(11)のような情報系のモダリティ(「確認要求」「質問」)が11例、42.3%で、やや行為系のモダリティのほうが多い。ナイデス形は、情報系のモダリティの「質問」に、中級で(12)の1例、上級で(13)の1例、合計2例が使用されるのみである。この2例の、否定疑問文としての用法⁶を検討すると、(12)「知らないですか」は「傾きのない否定疑問文」、(13)「本当にこのおかしはかえないですか」は「本当にお菓子を替えない」(品質に問題のあった菓子を交換してほしいと店員に頼むロールプレイ中の発話)という否定命題を含む「命題否定疑問文」である。

NNSによる否定疑問文の発話例はわずかなので、議論の対象たり得ないかもしれない。しかし、3章の④⑤で見たように、NSの「情報要求」場面におけるナイデス形は、命題否定疑問文として用いられる傾向があったこと、「勧誘・依頼」という行為系のモダリティにはナイデス形は皆無に近かったこと、この2点のNSの選択傾向に近いものは窺えるかもしれない。NNSは、聞き手に与える負担の大きい「依頼」とい

⁶ 安達(1999)は、否定疑問文には肯定、否定のどちらの答えを予測しているかという「傾き(bias)」を持つものがあるとして、肯定の「傾き」を持つものを「傾きを持つ否定疑問文」、肯定の見込みを考えにくいものを「傾きを持たない否定疑問文」とし、否定命題を問いかけるものを「命題否定疑問文」としている。このようにして、否定疑問文を「傾きを持つ否定疑問文」「傾きを持たない否定疑問文」「命題否定疑問文」の3つのタイプに分類している。

う発話行為においては、「くれませんか」「くださいませんか」「もらえませんか」「いただけませんか」という知識として得た、授受表現を含むマセン形が定型として定着していて、ナイデス形へのシフトは起きにくいものと思われる。そこには、当然、NSの日本語の影響も推察される。それは、川口（2010）では、NSは、「勧誘・依頼」という行為系のモダリティにはほとんどマセン形を用いており、ナイデス形はほとんど見られなかったからである。

一方、NNSによって用いられていた否定疑問文ナイデス形の2例は、どちらも「質問」のモダリティを有するものであった。そのうち、1例（13）が命題否定疑問文であったが、「傾きのない疑問文」とした（12）について検討すると、SはTに「どんな仕事ですか」と聞かれ、「んー、がい、あーこれ、がい、（うん）うーん、がいしがいし（うん）これちょっと難しいです、（あーそう）がいほうくん、（うん）」と、ことばが見つからず、自分でも「（説明するのが）難しいです」と言っているように、説明に苦しんでいる様子が窺える。Tのあいづちからも自分の説明が通じたとは思えず、相手の「知らない」という答えを予想して出てきた否定疑問文が「知らないですか」であるとも考えられ、（12）は命題否定疑問文なのかもしれない。ただし、この中級NNSは、ナイデス形を11例と、突出して用いており、中でも「知らないです」5例、「わからないです」2例を用いているので、「知らないです」については、ナイデス形として定着した化石化の可能性も十分考えられる。

以上のことから、NS同様にNNSも、明確な「否定」の意味をもつ場合に、疑問文においても否定辞「ない」の顕在化するナイデス形と結びつきやすくなる可能性が示唆される。

4.6 まとめ

第4章では、NNSが用いるマセン形とナイデス形について、発話行為に着目して観察した。

まず、4.2において、「情報提供」(平叙文)と「情報要求」(疑問文)にマセン形とナイデス形を分類したところ、圧倒的に「情報提供」(平叙文)の方が多く、ナイデス形のほとんどは情報提供する場合に用いられていた。これは、3章で見たNSの①と同様のものである。

4.3では、「情報提供」場面におけるナイデス形の使用傾向を観察した。その結果、すでに初級レベルでナイデス形が使用され、それは「否定」の意味を伝達する場合であることがわかった。初級で普通体が導入され、動詞否定普通形(「行かない」)を学んでもまもなく、相手の質問に対して否定判断を伝達するときに、デスを付加したナイデス形(「行かないです」)が現れるようになって推測される。これらの結果は、3章の②③と通じるものである。また、モダリティ表現化した「非否定」のナイデス形は上級レベルになってから使用されており、日本語能力が高くなると、ナイデス形の使用が「否定」から「非否定」へ拡大するものと思われる。川口(2010)では、NSのナイデス形のシフトが、「否定」のほうが「非否定」より大きかったことから、ナイデス形への言語変化は「否定」から「非否定」へと進むと予測したが、これは、日本語能力の向上とともにNNSが向かうナイデス形の使用傾向と同様のものと言えるだろう。

4.4では、否定疑問文のナイデス形の使用傾向を観察した。その結果、日本語能力に関わりなく、「依頼・勧誘」を表すモダリティにはすべてマセン形が用いられ、ごくわずかのナイデス形は、「質問」する場合にのみ用いられていた。これらのNNSの使用傾向は、3章の④⑤で見たNSの選択傾向と通底していると考えられる。

5. 考察

本研究で注目したいのは、初級レベルでナイデス形が使用されるのが、相手の発話に含意される「肯定－否定」の対立について話し手が「否定」という判断を下したことを伝達する否定判断文であったことである。「相手の質問に答える」という即時性が求められる場面において、初級NNSが、「否定」の意味を答えとして情報提供するときに、相手の質問文に埋め込まれたナイデス形を手がかりにして、普通形にデスを付加して応答する。「否定判断」を伝達するときに、相手の発話を手掛かりにナイデス形を作り出そうとする初級NNSの使用実態からは、「(1) よく使われている表現から考える」「(2) 抽象的な構造よりも具体的な意味から考える」(小林典子2005：p.25)という手掛かりによって作り出された「学習者独自の文法」(迫田2001)の存在が示唆される。NSが、やはり否定判断文においてナイデス形へシフトする傾向があったことを考え合わせると、まず「否定」という「意味」を伝えようとする発話の産出過程は、NSに限られるわけではなく、NNSにおいても存在するものと言えよう。金沢(2000)は、超上級学習者がネイティブに近い文法性判断能力を持っている可能性を指摘したが、本研究の観察結果からは、初級学習者がネイティブ同様の発話の産出過程を有する可能性が示唆されるだろう。

さらに、モダリティ表現化して「否定」の意味を失った「非否定」が、超上級NNSによって使用されていたという事実は、「否定」という認知から始まったナイデス形の使用が、「非否定」にまで拡大していることを示唆する。それは、川口(2010)で把握されたNSのナイデス形へのシフトが、やはり「否定」から「非否定」へと向かっていた言語変化の方向性と同様の言語事象と捉えられる。日本語非母語話者という異なる日本語能力によって示された「否定」から「非否定」へというナイデス

形の使用の拡大は、日本語母語話者による日本語の言語変化の方向性を示していると結論づけられる。

今回は、調査対象をKYコーパスに限ったため、特に否定疑問文のデータ数の不足が顕著で、4.5にはデータを補強する必要がある。また、日本語非母語話者の言語習得に大きな関わりを持つ母語の影響という視点は今回留保した。これらについては、今後の課題としたい。

参考文献

- (1) 相澤由佳・澤邊裕子 (2005) 「韓国高校日本語教科書に見られる規範－否定丁寧形「ません」と「ないです」の現れ方－」『東アジア文化共同体の可能性』韓国日本学連合会第3回国際学術大会 proceedings, pp.257-260
- (2) 安達太郎 (1999) 『日本語疑問文における判断の諸相』くろしお出版
- (3) 井島正博 (2006) 「否定疑問文の語用論的分析」益岡隆志他『日本語文法の新地平2』くろしお出版, pp.155-177
- (4) 尾崎奈津 (2004) 「否定の丁寧形「ナイデス」と「マセン」について」『岡山大学言語学論叢』11, pp.29-42
- (5) 金沢裕之 (2000) 「超上級学習者の隠れた文法判断能力－「なく中止形」を試験紙として－」『日本語教育』104号, pp.10-19
- (6) 金沢裕之 (2007) 「自然習得者の丁寧表現について」『月刊言語』36 (3) 大修館書店, pp.90-96
- (7) 金沢裕之 (2008) 『留学生の日本語は、未来の日本語－日本語の変化のダイナミズム－』ひつじ書房
- (8) 川口良 (2006) 「母語話者の「規範のゆれ」が非母語話者の日本語能力に及ぼす影響－動詞否定丁寧形「(書き)ません」と「(書

- か) ないです」の選択傾向を例として－』『日本語教育』129号, pp.11-20
- (9) 川口良 (2010) 「「ません」形から「ないです」形へのシフトに関わる要因について－動詞否定丁寧形の言語変化という視点から－』『日本語教育』144号, pp.121-132
- (10) 金銀珠 (2010) 「動詞否定丁寧形「～ません」と「～ないです」のモダリティ機能の比較』『日本語文法学会第11回大会発表予稿集』, pp.164-171
- (11) 小林典子 (2005) 「日本語学習者の誤用に見られる規則性』『日本語学』9月号、明治書院, pp.20-27
- (12) 小林ミナ (2005) 「日常会話にあらわれた「～ません」と「～ないです」』『日本語教育』125, pp.9-17
- (13) 迫田久美子 (2001) 「学習者独自の文法－学習者は独自の文法を作り出す－」野田尚史・迫田久美子・渋谷勝己・小林典子『日本語学習者の文法習得』大修館書店, pp.3-23
- (14) 澤邊裕子・相澤由佳 (2008) 「否定丁寧形「～ません」と「～ないです」に関する一考察－ことばの「ゆれ」が海外での日本教育・学習に与える影響－」宮城学院女子大学日本文学会『日本文学ノート』43号, pp.183-170
- (15) 田野村忠温 (1994) 「丁寧体の述語否定形の選択に関する計量的調査－「～ません」と「～ないです」－』『大阪外国語大学論集』11号, pp.51-66
- (16) 日本語記述文法研究会編 (2003) 『現代日本語文法4第8部モダリティ』くろしお出版
- (17) 野田春美 (2004) 「否定ていねい形「ません」と「ないです」の使用に関わる要因－用例調査と若年層アンケート調査に基づいて」

『計量国語学』 24-5, pp.228-244

- (18) 野田尚史 (2001) 「学習者独自の文法の背景－学習者独自の文法は必然的に生まれる－」『日本語学習者の文法習得』大修館書店, pp.45-62
- (19) 宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃 (2002) 『新日本語文法選書4モダリティ』くろしお出版
- (20) メイナード, 泉子K. (1993) 『会話分析』くろしお出版